

## 青年期における情動的共感性の特質\*

筑波大学心理学系

加藤 隆 勝

筑波大学大学院(博)心理学研究科

高木 秀 明

我々が社会の中で生活していく上で、他人との交渉やかかわりは不可欠なものである。この他人との交渉やかかわりを円滑に進めていくためには、他人の行動や感情をどれだけ理解できるかが一つの鍵になる。しかも、その際に他人の行動や感情を理解するだけでなく、さらに共感することができれば、他人に対する適切な態度や行動が生じやすくなるであろう。

共感はいくつかの研究者によって様々に定義されているが、それらを大別すると、認知的理解の側面を強調する定義と、情動反応の側面を強調する定義とがある。前者の例としては、Dymond (1949) の「他人の思考、感情、行為のなかに自分自身を想像的に置き換えて、その人のあるがままの世界を構成すること」、Rogers (1957) の「クライアントの私的な世界を、あたかも自分自身のものであるかのように感じとり、しかも、この「あたかも」のように」という性格を失わないこと、岩下 (1975) の「自分が主体となった先行経験の表象内容を相手に同一視することを以て為す、他者理解」などがある。後者の例としては、Stotland (1969) の「他人が情動状態を経験しているかまたは経験しようとしていると知覚したために、観察者にも生じた情動的な反応」、Gavrilova (1975) の「他人と同一視することによって、他人と同じ感情を経験すること」などがある。

ところで、Dymond の定義した共感はいくつかの研究者によって予測的共感 (predictive empathy) と呼ばれたのに対し、Stotland の定義した共感はいくつかの研究者によって情動的共感 (emotional empathy) と呼ばれた。そして、Mehrabian & Epstein はこの情動的共感性を測定するために、(a) Crowne & Marlowe (1960) の社会的望ましさの尺度と有意な相関がなく、

(b) 尺度の総得点 (尺度得点) と 1%水準での有意な相関があり、(c) 因子分析によって内容の妥当性が保証される、という 3 つの基準に基づいて 33 個の質問項目を抽出し、情動的共感性尺度を構成した。彼等はこの尺度を用いて、女性の方が男性よりも情動的共感性が高く、また情動的共感性の高い人は情動的共感性の低い人よりも援助行動を示すことが多く、攻撃行動を示すことが少ないという結果を得た。また高木 (1976) は、Mehrabian & Epstein の 33 個の質問項目を因子分析して、「感情的被影響性」の因子と「感情的暖かさ-冷たさ」の因子を抽出し、大学生女子の方が大学生男子よりも有意に感情的暖かさが強く、感情的被影響性も強い傾向があることを見出したが、それら 2 個の情動的共感性尺度は援助行動と有意な関係を持たなかった。さらに、高木の質問項目は Mehrabian & Epstein の質問項目を直訳したものであり、内容的に必ずしも日本人にふさわしいものばかりではなく、また、その研究の被験者は大学生のみであった。そこで以上の点をふまえた上で、本研究は Stotland の情動的共感性の定義に従い、次のことを目的として実施された。

(1) Mehrabian & Epstein の情動的共感性尺度項目の文章に手を加え、日本人の生活条件や生活感情によりふさわしい内容に変更した上で、因子分析を行い、新たな情動的共感性尺度を作成する。

(2) 作成した尺度を用いて、青年期 (中学、高校、大学生) における情動的共感性の発達の変容と性差を明らかにする。

(3) 情動的共感性の地域差 (首都圏、地方都市、農村) について検討する。

(4) 情動的共感性と自己概念、情動的共感性と独立意識の関係性を明らかにする。

### 方 法

#### 1. 尺度の作成

Mehrabian & Epstein (1972) の情動的共感性尺度 33 項目の内容を、3 名の心理学専攻者によって日本人に向くように検討、修正し、これを予備調査項目として、中学生、高校生、大学生に実施した。その際、各項目ごと

\* 本研究を実施するにあたって、各大学、高校、中学の諸先生、ならびに学生、生徒の方々に多大の御協力をいただいた。特に、東京学芸大学教授齋藤耕二、横浜国立大学講師福田幸男、筑波大学体育科学系助教授市村操一、心理学研究科吉田富二雄、水戸市立浜田小学校教諭今井雅人、東京都教育委員会指導主事宇井治郎、新宿区立四谷第二中学校教諭関根和夫の諸氏には格別のご援助をいただいた。記して謝意を表します。

Table 1 各項目の因子負荷量\*

| 項   | 目  | 因子   |       |                  | h <sup>2</sup> |
|-----|--|------|-------|------------------|----------------|
|     |  | I    | II    | III              |                |
| 1.  | 私は映画を見る時、つい熱中してしまう。                        | .59  | -.07  | .05              | .36            |
| 2.  | 歌を歌ったり、聞いたりすると、私は楽しくなる。                    | .57  | -.06  | -.07             | .33            |
| 3.  | 私は愛の歌や詩に深く感動しやすい。                          | .55  | -.03  | -.25             | .36            |
| 4.  | 私は動物が苦しんでいるのを見ると、とてもかわいそうになる。              | .46  | -.16  | -.08             | .24            |
| 5.  | 私は身寄りのない老人を見ると、かわいそうになる。                   | .45  | -.35  | .05              | .33            |
| 6.  | 私は人が冷遇されているのを見ると、非常に腹が立つ。                  | .44  | .03   | -.12             | .21            |
| 7.  | 私は大勢の中で一人ぼっちでいる人を見ると、かわいそうになる。             | .44  | -.12  | -.18             | .24            |
| 8.  | 私は贈り物をした相手の人が喜ぶ様子を見るのが好きだ。                 | .41  | -.08  | -.23             | .23            |
| 9.  | 私は会計事務所に勤務するよりも、社会福祉の仕事をする方がよい。            | .41  | .10   | .02              | .18            |
| 10. | 小さい子供はよく泣くが、かわいい。                          | .34  | -.10  | .15              | .15            |
| 11. | 私は人がうれしくて泣くのを見ると、しらけた気持ちになる。               | -.11 | .65   | .00              | .44            |
| 12. | 私は他人の涙を見ると、同情的になるよりも、いらだててくる。              | -.21 | .60   | .05              | .41            |
| 13. | 私は不幸な人が同情を求めているのを見ると、いやな気分になる。             | .03  | .57   | -.03             | .33            |
| 14. | 私は友人が悩みごとを話し始めると、話をそらしたくなる。                | -.06 | .56   | .10              | .33            |
| 15. | 私はまわりの人が悩んでも平気でいられる。                       | -.19 | .50   | .09              | .30            |
| 16. | 私は人がどうしてそんなに動揺することがあるのか理解できない。             | -.04 | .45   | .19              | .24            |
| 17. | 私は他人が何かのことで笑っていても、それに興味をそそられない。            | -.10 | .44   | .14              | .22            |
| 18. | 人前もはばからずに愛情が表現されるのを見ると、私は不愉快になる。           | .18  | .41   | -.15             | .22            |
| 19. | 私はまわりが興奮していても、平静でいられる。                     | -.15 | .41   | .31              | .29            |
| 20. | 私は映画を見ていて、まわりの人の泣き声やすすりあげる声を聞くと、おかしなことがある。 | -.38 | .36   | -.20             | .31            |
| 21. | 私は感情的にまわりの人からの影響を受けやすい。                    | .22  | .03   | -.74             | .59            |
| 22. | 私は友人が動揺していても、自分まで動揺してしまうことはない。             | .02  | .26   | .61              | .43            |
| 23. | 私は他人の感情に左右されずに決断することができる。                  | .21  | .13   | .59              | .41            |
| 24. | まわりの人が神経質になると、私も神経質になる。                    | .12  | .13   | -.49             | .27            |
| 25. | 私は悪い知らせを人に告げに行く時には、心が動揺してしまう。              | .40  | -.05  | -.43             | .34            |
| 26. | 私は小説を読むと、登場人物の気持ちに強く引き込まれてしまう。             | .64  | -.07  | -.08             | .42            |
| 27. | 私は友人の悩みに感情的にまきこまれてしまう傾向がある。                | .13  | .10   | -.60             | .39            |
| 28. | 小説や映画に熱中するのは、ばかげていると思う。                    | -.53 | .32   | -.09             | .39            |
| 29. | 一般に、外人は冷たくて、人の感情に鈍感のように思われる。               | -.24 | .39   | -.26             | .28            |
| 30. | 私は人が泣いているのを見ると困惑してしまう。                     | .36  | -.03  | -.25             | .19            |
| 31. | 動物を飼っている人は動物の気持ちを大げさに考えすぎている。              | -.06 | .36   | -.24             | .19            |
| 32. | 孤独な人間は薄情だと思う。                              | -.01 | .32   | -.02             | .10            |
| 33. | 私はまわりの人の気持ちが沈んでいると、平静でいることができない。           | .24  | -.25  | -.31             | .22            |
|     | 固  | 有    | 値     |                  |                |
|     | 寄  | 与    | 率 (%) | 3.75 3.41 2.78   | 9.94           |
|     |  |      |       | 11.36 10.33 8.42 | 30.11          |

\* 中学、高校、大学生全体についての因子分析の結果である。

に「全くそうだと思う」、「かなりそうだと思う」、「どちらかといえばそうだと思う」、「どちらともいえない」、「どちらかといえばちがうと思う」、「かなりちがうと思う」、「全くちがうと思う」の7件法で答えてもらい、それぞれの回答に対して7点から1点の得点を与えた。調査対象は茨城県内の中学生122名、埼玉県内の高校生

109名、茨城県内の大学生86名、合計317名である。調査期間は1978年6～7月である。

次に、調査結果を中学生、高校生、大学生別に主成分分析を行い、さらにバリマックス回転を行ったところ、それぞれがほぼ同一の因子構造をもつことが確認できた。そこで、中学、高校、大学生をまとめた全体について

て主成分分析とバリマックス回転を行って3因子を抽出し、これに基づいて3尺度25項目（7件法）からなる情動的共感性の測定尺度を作成した。各尺度を構成する項目の選択に関しては、因子負荷量が.40以上を基準とし、さらに中学、高校、大学別の因子分析結果をも参考にした。選択された項目数は、尺度Ⅰ、尺度Ⅱは各10項目、尺度Ⅲは5項目である。Table 1に各項目の因子負荷量を示す。Table 1のなかの項目1～10は尺度Ⅰ、項目11～20は尺度Ⅱ、項目21～25は尺度Ⅲを構成する。尺度Ⅰの項目はすべて感情的暖かさに、尺度Ⅱの項目はすべて感情的冷淡さに、尺度Ⅲの項目はすべて感情的被影響性に関係していると考えられる。従って、尺度Ⅰは「感情的暖かさ」の尺度、尺度Ⅱは「感情的冷淡さ」の尺度、尺度Ⅲは「感情的被影響性」の尺度と命名された。なお、項目26は第Ⅰ因子の負荷量が高いが、その内容はむしろ感情的被影響性に近いと考えられるので尺度Ⅰから除外された。項目28も第Ⅰ因子の負荷量が高いが、その内容は感情的冷淡さを表現していると考えられるので尺度Ⅰから除外された。項目27は第Ⅲ因子の負荷量が高いが、項目21とはほぼ内容が類似しているため尺度Ⅲから除外された。また、項目10と項目20の因子負荷量は.40未満であるが、中学、高校、大学別の因子分析においては高い負荷量を示したので、それぞれ尺度Ⅰ、尺度Ⅱのなかに含められた。

なお、本尺度の信頼性係数を算出した結果をTable 2に示す。尺度Ⅰと尺度Ⅱは十分な信頼性が得られたが、尺度Ⅲの信頼性は項目数が少ないことも影響して、やや不十分な結果になっている。

## 2. 本調査

作成した情動的共感性尺度を中学生、高校生、大学生に実施し、情動的共感性の発達の変容と性差を明らかにするとともに、中学生については、首都圏、地方都市、農村の地域差についても分析する。また同じ被験者を対象に、高木・加藤（1979）の作成した自己概念尺度および加藤・高木（1979）の作成した独立意識尺度を実施し、情動的共感性と自己概念ならびに独立意識との関係

Table 2 情動的共感性尺度の信頼性係数\*

| 尺度  | 係数 A** | 係数 B*** | 係数 C**** |
|-----|--------|---------|----------|
| I   | .74    | .74     | .75      |
| II  | .80    | .80     | .76      |
| III | .55    | .52     | .60      |

\* 対象は中学、高校、大学生計 677 名。

\*\* 尺度Ⅰ、尺度Ⅱは Spearman-Brown の公式による。尺度Ⅲは Horst の公式による。

\*\*\* Guttman の公式  $L_4$  による。

\*\*\*\* Cronbach の  $\alpha$  係数である。

Table 3 本調査の対象者数

|    | 首都圏 |     |     | 地方        |           | 合計  |
|----|-----|-----|-----|-----------|-----------|-----|
|    | 中学  | 高校  | 大学  | 都市の<br>中学 | 農村の<br>中学 |     |
| 男子 | 118 | 132 | 140 | 61        | 75        | 526 |
| 女子 | 86  | 95  | 106 | 60        | 89        | 436 |
| 合計 | 204 | 227 | 246 | 121       | 164       | 962 |

を検討する。自己概念および独立意識尺度の下位尺度は以下のとおりである。

### 自己概念尺度

尺度Ⅰ 反社会性

尺度Ⅱ 意欲性・活動性

尺度Ⅲ きちようめんさ・清潔さ

尺度Ⅳ 明朗性・友好性

尺度Ⅴ 情緒性

尺度Ⅵ 誠実さ

### 独立意識尺度

尺度Ⅰ 独立性

尺度Ⅱ 親への依存

尺度Ⅲ 反抗・内的混乱

被験者 調査は都内の公立中学校（3校）2年生、都内の公立高校（1校）および私立高校（1校）2年生、首都圏の国立大学（3校）1、2年生を対象に実施し、さらに中学生について地域差を検討するため、茨城県水戸市の公立中学校（1校）2年生、および茨城県内の農村地帯の公立中学校（1校、保護者の過半数が農業従事者）2年生を対象とした。人数はTable 3に示す。

調査期間 1978年12月～1979年1月。

## 結果（その1）

### 1. 発達傾向

Table 4 および Fig. 1～3 によって首都圏の中学、高校、大学生について情動的共感性の各尺度ごとの発達傾向を検討する。尺度Ⅰの「感情的暖かさ」については、男女とも高い評定を示しており、特に女子の評定が高い。発達の変化は、男子では中学、高校、大学と進むにつれて評定が高くなる傾向が認められるが、その変化は有意ではない。女子では高校生の評定が最も高く、大学生との間に有意差が認められる。尺度Ⅱの「感情的冷淡さ」については、男女とも低い評定を示しており、特に女子の評定が低い。発達の変化は、中学、高校、大学と進むにつれて、男子では評定が低くなる傾向、女子では評定が高くなる傾向が認められるが、いずれも有意ではない。尺度Ⅲの「感情的被影響性」については、男子は中間程度の評定であるが、中学、高校、大学と進むに

Table 4 情動的共感性尺度の尺度別得点

| 性別 | 尺度  | 首都圏      |               |               | 地方            |               | 発達差           |     |     | 地域差 |     |     | 性差 |    |    |    |    |
|----|-----|----------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|-----|-----|-----|-----|-----|----|----|----|----|----|
|    |     | 中学(A)    | 高校(B)         | 大学(C)         | 都市の<br>中学(D)  | 農村の<br>中学(E)  | A-B           | A-C | B-C | A-D | A-E | D-E | A  | B  | C  | D  | E  |
| 男子 | I   | M<br>S D | 47.17<br>9.40 | 48.64<br>7.95 | 49.62<br>7.07 | 48.57<br>7.28 | 45.75<br>6.06 |     |     |     |     |     | ** | ** | ** | ** | ** |
|    | II  | M<br>S D | 33.07<br>8.88 | 31.64<br>8.29 | 31.49<br>7.52 | 31.20<br>8.05 | 34.84<br>5.21 |     |     |     | **  | **  | ** |    | *  | ** |    |
|    | III | M<br>S D | 19.31<br>4.30 | 20.67<br>4.51 | 21.78<br>4.48 | 20.52<br>3.91 | 19.91<br>2.84 | *   | **  | *   |     |     | ** | ** | ** |    | ** |
| 女子 | I   | M<br>S D | 52.91<br>7.32 | 54.69<br>7.27 | 52.33<br>6.03 | 53.17<br>5.71 | 51.96<br>6.96 |     |     | *   |     |     |    |    |    |    |    |
|    | II  | M<br>S D | 27.60<br>6.69 | 28.38<br>8.59 | 29.92<br>6.70 | 28.53<br>6.33 | 29.26<br>7.70 |     |     |     |     |     |    |    |    |    |    |
|    | III | M<br>S D | 21.53<br>3.84 | 23.01<br>4.21 | 23.32<br>4.01 | 21.62<br>3.16 | 21.57<br>2.96 | *   | **  |     |     |     |    |    |    |    |    |

(注1) 尺度I, IIの最高可能得点は70, 最低可能得点は10, 中間の得点は40. 尺度IIIの最高可能得点は35, 最低可能得点は5, 中間の得点は20.

(注2) 発達差, 地域差は分散分析による多重比較. \* P<.05, \*\* P<.01

(注3) 性差はt検定. \* P<.05, \*\* P<.01

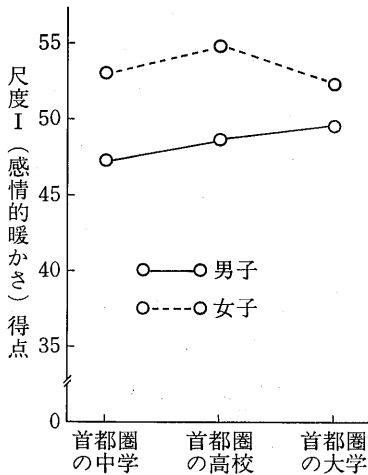


Fig. 1 感情的暖かきの発達傾向

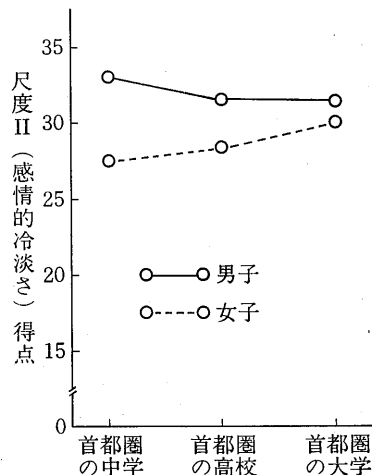


Fig. 2 感情的冷淡きの発達傾向

つれて評定は有意に高くなっている。女子の評定はやや高く、発達のには高校、大学生の評定が中学生の評定よりも有意に高くなっている。

全体的な傾向として、首都圏の青年は感情的に暖かく、冷淡さは少ないと自己評定する結果が示されている。またその傾向は女子の方が強いことも示されている。発達のには、中学、高校、大学生と進むにつれて、「感情的被影響性」が高くなることが示されている。

2. 地域差

Table 4 および Fig. 4~6 によって、首都圏の中学生、地方都市の中学生、農村の中学生について、情動的共感性の各尺度ごとの地域差を検討する。尺度Iの「感情的暖かさ」については、男女とも高い評定を示しているが、特に女子の評定が高い。地域差をみてみると、男子では地方都市の中学生の評定が最も高く、農村の中学生の評定が最も低くなっている。女子でも同様の結果が認められる。しかし男女とも、その地域差は有意なもの

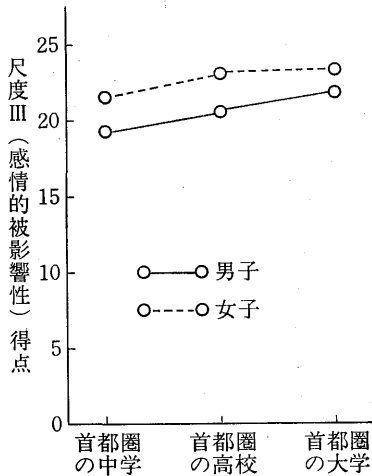


Fig. 3 感情的被影響性の発達傾向

ではない。尺度Ⅱの「感情的冷淡さ」については、男女とも低い評定を示しているが、特に女子の評定が低い。地域差に関しては、男子では地方都市の中学生の評定が最も低く、農村の中学生の評定が最も高いことが示されており、両者の間には有意差が認められる。女子では首都圏の中学生の評定が最も低く、農村の中学生の評定が最も高いが、その差は小さく、有意なものではない。尺度Ⅲの「感情的被影響性」については、男子はほぼ中間程度の評定であり、女子はわずかに高い評定を示している。地域差については、男女とも有意な差は認められない。

以上をまとめると、3地域の中学生とも感情的に暖かく、冷淡さは少ないという結果が示されており、本調査の範囲では顕著な地域差はほとんど存在しない。

### 3. 性差

Table 4 に示されているように、性差はほとんど有意である。尺度Ⅰの「感情的暖かさ」については、どの発達段階または地域においても女子の評定の方が男子の評定よりも有意に高くなっている。尺度Ⅱの「感情的冷淡さ」については、首都圏の大学生を除き、いずれも女子の評定の方が男子の評定よりも有意に低くなっている。尺度Ⅲの「感情的被影響性」については、地方都市の中学生を除き、いずれも女子の評定の方が男子の評定よりも有意に高くなっている。以上をまとめると、女子は男子よりも感情的に暖かく、かつ冷淡さは少なく、しかも「感情的被影響性」が高いことが示されている。

#### 結果(その2)

#### 1. 情動的共感性と自己概念の関係

Table 5 によって情動的共感性と自己概念の関係を分析する。情動的共感性の尺度Ⅰ(感情的暖かさ)は、首

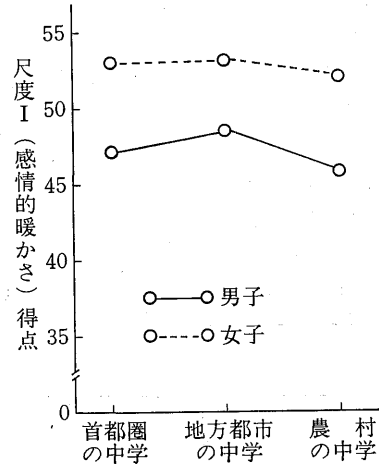


Fig. 4 感情的暖かさの地域差

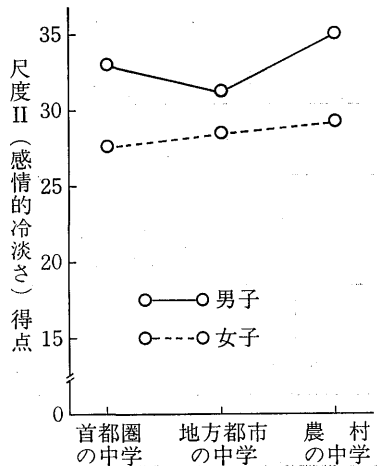


Fig. 5 感情的冷淡さの地域差

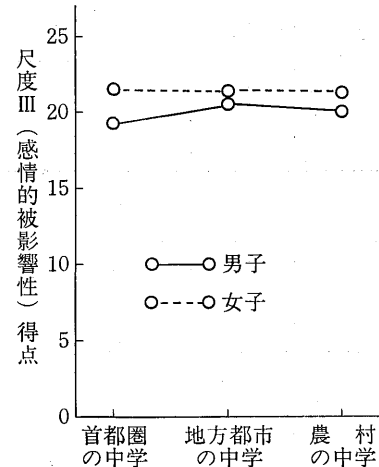


Fig. 6 感情的被影響性の地域差

Table 5 情動的共感性尺度と自己概念尺度, 独立意識尺度との相関係数

|             |                            |        |          | 自己概念尺度 |       |        |        |        |        | 独立意識尺度 |        |        |        |
|-------------|----------------------------|--------|----------|--------|-------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
|             |                            |        |          | I      | II    | III    | IV     | V      | VI     | I      | II     | III    |        |
| 首<br>都<br>圏 | 中<br>学<br>生                | 男<br>子 | 情動的共感性尺度 | I      | -.15  | .27**  | .15    | .23*   | .22*   | .13    | .38**  | .30**  | .07    |
|             |                            |        |          | II     | .22*  | -.18   | -.26** | -.18   | -.20*  | -.27** | -.11   | -.33** | .23*   |
|             |                            |        |          | III    | -.05  | -.15   | -.08   | .01    | .13    | .14    | -.14   | .40**  | .09    |
|             | 高<br>校<br>生                | 女<br>子 | 情動的共感性尺度 | I      | .17   | .17    | -.07   | .37**  | .33**  | .08    | .05    | -.10   | .14    |
|             |                            |        |          | II     | .11   | -.11   | -.08   | -.34** | -.20   | -.21   | -.19   | .01    | .02    |
|             |                            |        |          | III    | .33** | .03    | -.11   | .21    | .47**  | -.13   | -.21   | -.03   | .27*   |
|             |                            |        |          | 自己概念尺度 |       |        |        |        |        | 独立意識尺度 |        |        |        |
|             |                            |        |          | I      | II    | III    | IV     | V      | VI     | I      | II     | III    |        |
| 地<br>方<br>圏 | 大<br>学<br>生                | 男<br>子 | 情動的共感性尺度 | I      | -.18* | .19*   | .22*   | .30**  | .29**  | .31**  | .27**  | .20*   | .00    |
|             |                            |        |          | II     | .35** | -.24** | -.19*  | -.19*  | -.12   | -.15   | -.32** | .03    | .10    |
|             |                            |        |          | III    | .16   | -.28** | -.13   | .03    | .41**  | -.10   | -.28** | .12    | .21*   |
|             | 都<br>市<br>の<br>中<br>学<br>生 | 女<br>子 | 情動的共感性尺度 | I      | -.18  | -.08   | -.13   | .31**  | .22*   | .17    | .14    | .20    | -.29** |
|             |                            |        |          | II     | .19   | .15    | .18    | -.28** | -.14   | .04    | -.03   | -.09   | .31**  |
|             |                            |        |          | III    | .09   | -.42** | -.13   | .02    | .31**  | .11    | -.30** | .35**  | -.01   |
|             |                            |        |          | 自己概念尺度 |       |        |        |        |        | 独立意識尺度 |        |        |        |
|             |                            |        |          | I      | II    | III    | IV     | V      | VI     | I      | II     | III    |        |
| 方<br>地<br>圏 | 大<br>学<br>生                | 男<br>子 | 情動的共感性尺度 | I      | -.10  | .00    | -.02   | .12    | .28**  | .20*   | .13    | .08    | -.07   |
|             |                            |        |          | II     | .19*  | .12    | -.02   | -.13   | -.22** | -.16   | -.07   | -.10   | .20*   |
|             |                            |        |          | III    | .16   | -.52** | -.15   | -.17*  | .51**  | -.01   | -.55** | .23**  | .23**  |
|             | 都<br>市<br>の<br>中<br>学<br>生 | 女<br>子 | 情動的共感性尺度 | I      | -.13  | .08    | -.05   | .34**  | .34**  | .22*   | .20*   | .16    | -.27** |
|             |                            |        |          | II     | .28** | .03    | -.15   | -.25** | -.32** | -.16   | -.14   | .06    | .33**  |
|             |                            |        |          | III    | -.02  | -.43** | .14    | .02    | .37**  | .02    | -.42** | .18    | .16    |
|             |                            |        |          | 自己概念尺度 |       |        |        |        |        | 独立意識尺度 |        |        |        |
|             |                            |        |          | I      | II    | III    | IV     | V      | VI     | I      | II     | III    |        |
| 方<br>地<br>圏 | 大<br>学<br>生                | 男<br>子 | 情動的共感性尺度 | I      | -.21  | .16    | .05    | .58**  | .25    | .43**  | .06    | .22    | .00    |
|             |                            |        |          | II     | .30*  | -.12   | .06    | -.43** | -.13   | -.09   | -.06   | -.04   | .03    |
|             |                            |        |          | III    | .05   | -.35** | -.03   | .03    | .10    | .11    | -.42** | .31*   | .33**  |
|             | 都<br>市<br>の<br>中<br>学<br>生 | 女<br>子 | 情動的共感性尺度 | I      | .03   | .23    | -.15   | .11    | .38**  | .09    | .26*   | .09    | -.06   |
|             |                            |        |          | II     | .07   | -.07   | .09    | -.01   | -.27*  | -.13   | -.05   | -.10   | .24    |
|             |                            |        |          | III    | .09   | -.24   | -.17   | -.11   | .30*   | -.03   | -.37** | .13    | .11    |
|             |                            |        |          | 自己概念尺度 |       |        |        |        |        | 独立意識尺度 |        |        |        |
|             |                            |        |          | I      | II    | III    | IV     | V      | VI     | I      | II     | III    |        |
| 方<br>地<br>圏 | 大<br>学<br>生                | 男<br>子 | 情動的共感性尺度 | I      | -.27* | .36**  | .23*   | .27*   | .07    | .22    | .43**  | -.25*  | -.07   |
|             |                            |        |          | II     | .35** | -.39** | .08    | -.19   | -.07   | -.17   | -.31** | .17    | .28*   |
|             |                            |        |          | III    | .13   | -.38** | -.10   | -.21   | .18    | -.15   | -.37** | .29*   | .15    |
|             | 都<br>市<br>の<br>中<br>学<br>生 | 女<br>子 | 情動的共感性尺度 | I      | -.06  | .12    | -.01   | .32**  | .30**  | .14    | .25*   | .27**  | .04    |
|             |                            |        |          | II     | .21   | .02    | .11    | -.23*  | -.13   | -.05   | -.18   | -.02   | .04    |
|             |                            |        |          | III    | .04   | -.14   | -.10   | -.08   | .15    | -.06   | -.15   | -.11   | .03    |

\* P < .05, \*\* P < .01

都圏の大学生男子，地方都市の中学生女子を除いて，自己概念の尺度Ⅳ（明朗性・友好性）と有意な正の相関を有する。また地方都市の中学生男子，農村の中学生男子を除いて，自己概念の尺度Ⅴ（情緒性）とも有意な正の相関を有する。

情動的共感性の尺度Ⅱ（感情的冷淡さ）は，男子において，自己概念の尺度Ⅰ（反社会性）と有意な正の相関を示し，女子においては，地方都市の中学生を除いて，自己概念の尺度Ⅳ（明朗性・友好性）と有意な負の相関を示している。

情動的共感性の尺度Ⅲ（感情的被影響性）は，自己概念の尺度Ⅱ（意欲性・活動性）と，男子においては首都圏の中学生を除いて有意な負の相関を示し，また女子においては首都圏の高校生と大学生において有意な負の相関を示している。また自己概念の尺度Ⅴ（情緒性）とは，男子においては首都圏の高校生と大学生において有意な正の相関を示し，女子においては農村の中学生を除いて有意な正の相関を示している。

以上をまとめると，一般に，「感情的暖かさ」は自己概念の「明朗性・友好性」および「情緒性」と関連をもち，「感情的冷淡さ」は「反社会性」と関連する傾向が認められる。また「感情的被影響性」は「意欲性・活動性」の低さ，および「情緒性」と関連することが示されている。

## 2. 情動的共感性と独立意識の関係

Table 5 をみてみると，情動的共感性の尺度Ⅰ（感情的暖かさ）は，独立意識の尺度Ⅰ（独立性）と，男子においては首都圏の中学，高校生，農村の中学生において有意な正の相関を示し，女子においても首都圏の大学生，地方都市の中学生，農村の中学生において有意な正の相関を示している。しかし，それはまた同時に独立意識の尺度Ⅱ（親への依存）とも，首都圏の中学，高校生男子，および農村の中学生女子において，有意な正の相関を示している。ただし農村の中学生男子においては，独立意識の尺度Ⅱ（親への依存）とは有意な負の相関を示しており，必ずしも一貫した傾向が得られていない。さらに情動的共感性の尺度Ⅰ（感情的暖かさ）は，首都圏の高校，大学生女子において，独立意識の尺度Ⅲ（反抗・内的混乱）と有意な負の相関を示している。

情動的共感性の尺度Ⅱ（感情的冷淡さ）は，首都圏の高校生男子，農村の中学生男子において，独立意識の尺度Ⅰ（独立性）と有意な負の相関を示している。また首都圏と農村の中学生男子，首都圏の大学生男子，および首都圏の高校，大学生女子において，独立意識の尺度Ⅲ（反抗・内的混乱）と有意な正の相関を示している。

情動的共感性の尺度Ⅲ（感情的被影響性）は，首都圏の中学生男女，農村の中学生女子を除いて，独立意識の

尺度Ⅰ（独立性）と有意な負の相関を有する。またそれは首都圏の高校生を除いた男子において，独立意識の尺度Ⅱ（親への依存）と有意な正の相関を示し，さらに首都圏の高校，大学生男子，地方都市の中学生男子においては，独立意識の尺度Ⅲ（反抗・内的混乱）とも有意な正の相関を示している。

以上をまとめると，一般に，「感情的暖かさ」は「独立性」とも「親への依存」とも関連をもつ傾向を示し，また高校，大学の女子においては「反抗・内的混乱」の低さと関連する傾向が認められる。「感情的冷淡さ」は男子においては「独立性」の低さと，また中学生男子や高校，大学生の女子においては「反抗・内的混乱」と関連をもつ傾向を示している。「感情的被影響性」は一般に「独立性」の低さと関連をもち，また男子においては「親への依存」や「反抗・内的混乱」と関連をもつ傾向を示している。

## 考 察

本研究において作成された情動的共感性尺度は，「感情的暖かさ」，「感情的冷淡さ」，「感情的被影響性」の3つの下位尺度に分かれたが，Mehrabian & Epstein (1972) の場合は全体が一つにまとまっており，高木(1976) の場合には「感情的暖かさ—冷たさ」と「感情的被影響性」の2つの下位尺度に分かれている。本研究や高木の研究は，日本人の場合には情動的共感性は一つの次元だけで構成されるのではなく，2つ以上の次元によって構成されることを示している。そして，本研究によって抽出された「感情的暖かさ」尺度と「感情的冷淡さ」尺度の2つの尺度は，高木の「感情的暖かさ—冷たさ」尺度に対応すると考えられる。このことは，「感情的暖かさ」尺度と「感情的冷淡さ」尺度が，本研究で用いたどの発達段階，地域においてもある程度の負の相関（ $-0.42 \sim -0.65$ ）を示したことからも裏づけられる。しかし「感情的暖かさ」と「感情的冷淡さ」とは同一次元上の両端に位置するものではないことが，後に述べる自己概念や独立意識との関係から示唆される。

次に現代の青年は，発達段階や地域に関係なく，自己を感情的に暖かく，冷淡さは少ないとみる結果が得られたが，このことは従来から青年期の特徴としてあげられている感受性の強さとも一致するといえるであろう。しかもその傾向は女子の方が強いという点も，過去の研究と一致するものである。従ってこれらの事実は，青年期の一般的な特徴を示すものと結論しうるのである。

「感情的被影響性」については，男女とも発達段階が進むにつれて，他者からの感情的な影響を受けやすくなり，男子と女子を比べると女子の方が感情的影響を受けやすいという結果が得られた。しかしその被影響性の強さを見てみると，男子はほぼ中間程度であり，女子はや

や影響を受けやすいといった程度である。このことは、現代の青年が他者からそれほど大きな感情的影響を受けないこと、即ち感情的には自己の独立性をある程度確立していることを示している。しかしその傾向は中学生において最も顕著であり、高校、大学と進むにつれて、やや独立性がぐらついてくる。以上の点は青年の自我の確立とどのようにかかわり合うのか、きわめて興味深い問題であり、さらに実証的分析を積み重ねることが必要であろう。

情動的共感性と自己概念の関係では、「感情的暖かさ」尺度が「明朗性・友好性」尺度と正の相関を示すことは、両尺度の性質からして当然であると考えられる。それに対して、「感情的冷淡さ」尺度が「明朗性・友好性」尺度と負の相関を持つのは主に女子においてであり、男子においては「感情的冷淡さ」尺度は必ずしも「明朗性・友好性」尺度と負の相関を示していない。このことから、「感情的暖かさ」と「感情的冷淡さ」とは必ずしも同一次元上の両極ではないことが示唆されるであろう。「感情的冷淡さ」尺度で男子に特徴的なのは、「反社会性」尺度と正の相関を持つことである。このように、男子と女子では「感情的冷淡さ」の意味が異なることが指摘される。男子では感情的な冷淡さは直接反社会性と結びつくのに対して、女子ではそのようなことはなく、明朗・友好的でないことと関係している。

次に、「感情的被影響性」がほぼどの発達段階においても「情緒性」と正の相関があることは当然のことと考えられるが、中学生男子においてはそのような関係はみられない。「感情的被影響性」は中学生男子にとっては他の集団とは異なる機能をもつものといえよう。また、「感情的被影響性」が中学生女子を除いて「意欲性・活動性」と負の相関があることから、多くの場合に、感情的な独立性が態度や行動面での積極性と結びつく可能性が示唆される。それに対して中学生女子においては、感情的な独立は必ずしも態度や行動面での積極性と結びつかないようである。

情動的共感性と独立意識の関係をみると、「感情的暖かさ」は「独立性」と大体正の相関を示している。これは両者の間に、共通する健康な側面があるためであろう。「感情的暖かさ」と「親への依存」は、農村の中学生男子においては負の相関を示し、農村の中学生女子においては正の相関を示している。このことは、農村の中学生の男女にとって、「親への依存」の意味が異なることを示唆している。即ち、農村の中学生男子にとっては、「親への依存」は負の意味を持ち、農村の中学生女子にとっては正の意味を持つと考えられる。また「感情的暖かさ」は、首都圏の高校、大学生女子において「反抗・内的混乱」と負の相関を示しているが、このことは、同じく首都圏の高校、大学生女子において、「感情

的冷淡さ」が「反抗・内的混乱」と正の相関を示していることと対応して、首都圏の高校、大学生女子の特徴を示している。即ち、首都圏の高校、大学生女子においては、感情的に暖かな人は精神的に安定し、混乱のないことが示唆される。次に、「感情的被影響性」は「独立性」と大体負の相関を示しているが、これは感情的な独立性が、心理的または行動的独立性と結びつくということを示唆するものであろう。また「感情的被影響性」は、男子においては、「親への依存」や「反抗・内的混乱」と大体正の相関を示している。このことは、「感情的被影響性」が男子に対しては負の効果をもつことを示唆している。

以上、情動的共感性について、その発達や性差、自己概念や独立意識との関係について考察してきたが、特に男女間において情動的共感性の意味が大きく異なることが注目され、今後はこの点を配慮して研究を進めることが大切であろう。

なお、本研究で示した地域差は、地方都市、農村がそれぞれ1地点にすぎないので、結果を一般化するには必ずしも十分とはいえない。したがって、地域差については今後さらに検討を進める予定である。

## 要 約

共感は大別して、予測的共感と情動的共感に分けられるが、本研究は情動的共感的を絞り、(a) 情動的共感性尺度の作成、(b) 青年期における情動的共感性の発達の変容と性差の検討、(c) 地域差(首都圏、地方都市、農村)の検討、(d) 情動的共感性と自己概念および独立意識との関係の解明、を目的として実施された。

尺度作成の際に用いた被験者は317名の中学、高校、大学生であり、本調査で用いた被験者は962名の中学、高校、大学生であった。

作成された情動的共感性尺度は、「感情的暖かさ」、「感情的冷淡さ」、「感情的被影響性」の3つの下位尺度によって構成された。

本調査から次の結果が得られた。

1. 青年は、発達段階や地域に関係なく、自己を感情的に暖かく、冷淡さは少ないとみる傾向がある。
2. 上記の傾向は女子の方がより顕著である。
3. 発達段階が進むにつれて、「感情的被影響性」は高くなり、男子より女子の方が感情的影響を受けやすい傾向を示す。
4. 「感情的暖かさ」は「明朗性・友好性」および「独立性」と正の相関を示す。
5. 農村の中学生において、「感情的暖かさ」と「親への依存」は、男子においては負の相関を示し、女子においては正の相関を示す。
6. 「感情的冷淡さ」は、男子においては「反社会



性」と正の相関を示し、女子においては「明朗性・友好性」と負の相関を示す。

7. 首都圏の高校、大学生女子においては、「反抗・内的混乱」は「感情的暖かさ」とは負の相関を示し、「感情的冷淡さ」とは正の相関を示す。

8. 「感情的被影響性」は「情緒性」と正の相関を示し、「意欲性・活動性」および「独立性」とは負の相関を示す。

9. 男子においては、「感情的被影響性」は「親への依存」および「反抗・内的混乱」と正の相関を示す。

#### 引用文献

- Crowne, D. P., & Marlowe, D. 1960 A new scale of social desirability independent of psychopathology. *Journal of Consulting Psychology*, 24, 349-354.
- Dymond, Rosalind F. 1949 A scale for the measurement of empathic ability. *Journal of Consulting Psychology*, 13, 127-133.
- Gavrilova, T. P. 1975 An experimental study of empathy in children of young and middle school age. *Soviet Psychology*, 13, 3-17.
- 岩下豊彦 1975 共感の社会心理 春木 豊・岩下豊彦 (編) 共感の心理学 川島書店 Pp. 121-170.
- 加藤隆勝・高木秀明 1979 青年期の独立意識と自己概念の関係(1), (2) 日本教育心理学会第21回総会発表論文集, 254-257.
- Mehrabian, A., & Epstein, N. 1972 A measure of emotional empathy. *Journal of Personality*, 40, 525-543.
- Rogers, C. R. 1957 The necessary and sufficient conditions of therapeutic personality change. *Journal of Consulting Psychology*, 21, 95-103.
- Stotland, E. 1969 Exploratory investigations of empathy. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology*. Vol. 4. New York: Academic Press. Pp. 271-314.
- 高木秀明 1976 情動的共感性と援助行動の関係に関する研究 日本教育心理学会 第18回 総会発表論文集, 448-449.
- 高木秀明・加藤隆勝 1979 青年期における自己概念の発達の変容(1), (2) 日本心理学会第43回大会発表論文集, 410-411.

—1979. 10. 19. 受稿—

## SUMMARY

### Characteristics of the Emotional Empathy in Adolescence

Takakatsu Kato & Hideaki Takagi

The University of Tsukuba

Empathy may be classified into two large groups, i. e., the predictive empathy and the emotional empathy. The predictive empathy has been defined as "the imaginative transposing of oneself into the thinking, feeling and acting of another and so structuring the world as he does" (Dymond, 1949), and the emotional empathy as "an observer's reacting emotionally because he perceives that another is experiencing or is about to experience an emotion" (Stotland, 1969). In this study, the emotional empathy was exclusively examined. Specifically, it aimed to construct a scale of the emotional empathy, to investigate developmental changes and differences by sex and region (a metropolitan area, a provincial city and a farm village) in the emotional empathy in adolescence, and further to clarify the relations of the emotional empathy to the self-concept and the awareness of independence.

Based upon the results of factor analyses of 317 adolescents' responses to 33 questionnaire items, a scale of the emotional empathy consisting of three subscales (i. e., "emotional-warmth", "emotional-coolness", and "emotional-susceptibility" subscales) was constructed, and was administered to 962 junior and senior high school and college students together with scales of the self-concept and the awareness of independence.

The following results were obtained:

(1) Regardless of age, sex, and region, adolescents were characterized by warm and not cool emotional empathy.

(2) The above tendency was more marked in females than in males.

(3) The adolescent "emotional-suscepti-

bility" was higher in females than in males, and it rose with age for both sexes.

(4) The "emotional-warmth" scale was positively correlated with the "cheerfulness-friendliness" scale and the "independence" scale.

(5) Among the male junior high school students in a farm village the "emotional-warmth" scale was negatively correlated with the "dependence-upon-parents" scale, but it was positively correlated among the female junior high school students in a farm village.

(6) The "emotional-coolness" scale was positively correlated with the "antisocialness" scale in the male adolescents, and negatively correlated with the "cheerfulness-friendliness" scale in the female adolescents.

(7) The "disobedience-confusion" scale was negatively correlated with the "emotional-warmth" scale and positively correlated with the "emotional-coolness" scale in the female senior high school and college students in the metropolitan area.

(8) In general, the "emotional-susceptibility" scale was positively correlated with the "emotionality" scale, and negatively correlated with the "activeness" scale and the "independence" scale.

(9) Among the male adolescents, the "emotional-susceptibility" scale was positively correlated with the "dependence-upon-parents" scale and the "disobedience-confusion" scale.

The fact that the emotional empathy had different implications for the male and female adolescents needs to be taken into account in future research in the adolescent empathy.